

アイヌ口承文芸テキスト集 9

白沢ナベ口述 カニに手足が生えるわけ

採録・訳・註 中川裕

今回紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、千歳市蘭越の故白沢ナベ氏による、amuspe「カワガニ」を主人公とするカムイユカラ「神謡」であり、姪にあたる小山田ミヨという人から聞いた話であるという。

このカムイユカラは、1991年2月18日に2回（整理番号：N9102183YK、N9102184YK）、1993年5月23日に1回（整理番号：N9305232KY）、氏の御自宅において筆者が録音している。そのうちN9305232KYについては、千葉大学文学部の1999年度「アイヌ語中級」、2000年度「アイヌ語初級」、2002年度「アイヌ語中級」および2008年度「アイヌ語学演習d」と、合計4度にわたって教材として使ってきた。それは、この話が全部で7分程度の、授業で扱うのに時間的に非常に手ごろな長さであるということもあるが、何よりこうした伝承文学を貫く基本的なものの考え方が、非常にわかりやすい形で示された話であり、アイヌの物語世界への導入を行うのに最適の教材だと感じるからである。同じ理由で、拙著『アイヌの物語世界』（1997、平凡社ライブラリー）でも、神謡の内容について扱った第1章第2節「カムイたちの見た世界—神謡の教えるもの」の冒頭でこの話を紹介し、この節の主題説明的な役割を担わせている。

1991年に、最初に語ってもらった際には（N9102183YK）、主人公のカニの手足を折る人物は、はじめのうちサマユンクルの娘ということになっていた。しかし、話の途中でサマユンクルではなく、オキクルミの娘であると御自身で訂正したので、後でもう一度語りなおしてもらった（N9102184YK）。その2年後に再び語ってもらったのがN9305232KYであるが、ここではオキクルミの妹になっている。

白沢氏としては、自分が誤りだとしたものを公開されるのは不本意だろうとは思いますが、それ以外の点について、同じ語り手が同じ話を語る際にどのように変容していくかということを考えるのに、この3つのバージョンは非常に貴重な資料であると考えるので、3つともここに訳出させていただくことにする。実はメロディも91年のふたつと93年のものとは若干違い、91年のものはユチカユチー、93年のものはユーチカユチーと表したほうがよいようなサケへで謡われている。

なお、下記の「あらすじ」はN9305232KYに基づくものを、掲げておくことにする。

あらすじ

ある日のこと、川上に向かって歩いていたら、干し魚が一本水につけてあったので、それを食べていた。すると、女が下駄を履いて下りてきて私を見つけると、私をにらみつけてこう言った。

「お前に食べさせるために水に漬けておいたのじゃないよ！ この化け物め、漬けておいた魚を食べ
てしまいよって！」

と言いながら私をつかみ、私の手を折り、私の足を折り、川の真ん中に向かってぽんと私を放り
投げた。私は泣きながら水に流されていって、ようようのことで自分の家にたどりついた。折られた
ところが痛むので私は泣きながら暮らしていたが、超能力で見ると、私の手足を折ったのはオキ
クルミカムイの妹であったことがわかった。

私は腹が立ったので、オキクルミカムイの妹の足を折り、手を折った。すると、オキクルミカムイ
は、いったいどのどいつが自分の妹の足を折り、手を折ったのかと探している。けれども、私は自
分の前にもやをかけて、見つけられないようにしていた。しかし、オキクルミカムイはたったひとり
の妹なので、何とかして足も手も元通りにしたいというので、探し続けていた。

いつまでも自分の前にもやをかけておくのも、おそれおおいので、

「これこれこういうわけで、ある日川を上っていたら水に漬けた干し魚があったので、それを食べて
いたところ、後であなたの妹だとわかったのですが、女が下りて来て私をひつつかみ、私の手をむし
り、私の足をむしり、川の真ん中へ投げ捨てたので、私は足も無く、手も無く、泣きながらいたので
す」ということを、オキクルミカムイに夢で知らせた。

すると、オキクルミカムイは私に謝罪し、イナウも削って、

「これまでは、カニというものは、手をむしってもふたたび生えてはこないものだったが、あなたの
手も足もまた生えてくるように、私が見守りますので、私の馬鹿な妹を（治してやってください）」と
私にお祈りした。）

そこで私も謝った。私の足がまた生えるように、オキクルミカムイがしてくれたので、彼の妹の手
も足もつながるようにしてやった。こうして妹の足もつながり、手も治り、私の手も生え、足も揃っ
たので、その話をするのだと、カワガニのカムイが語ったとき。

解説

この物語の最も重要な点は、主人公がカワガニ（モクズガニ）という小動物であり、オキクルミと
いうえらいカムイの妹（N9102183YK、N9102184YK では「娘」となっている）が悪役として登場
するという点である。カワガニが主人公となるカムイユカラが他にどれだけあるのかは現時点では定
かでないが、おそらくあまり多くはない。『コタン生物記』でもこの動物については半ページほどの
記述しかなく（488）、川の神へ頼みごとをする際の仲立ちをしてもらうとか、難産の時に頼むとか書
かれているが、物語に関する情報はない。『分類辞典：動物篇』では、かろうじて amuspe や ampayaya
という名前があがっているだけである。カワガニはかつて北海道中の川で見られたというカニである
が、千歳川にもかつてはたくさんいたらしく、白沢氏は、子供の時それをとって食べた話をよく語っ

ていた。1992年6月1日に、沙流郡平取町の上田トシ氏が白沢氏宅を訪れた折にもその話をしているので、その部分を次に掲げる。

ku=pon h_i wano esokka peray anak, esokka peray, amuspe peray. amuspe poronno an pe ne. arikinne amuspe は、keraan. piye p だから。ここのはびっちり身入っているから。それ peraykar して、e a e a anak k=amkir wa k=an. tutto も amuspe peray. cipo ... cipo amuspe peray. こう穴さ入っているところに、こう、ミミズこうやっていると、出てきてかぶっところ、つかむから引っ張れば落ちないでちかめるの。それやって、たくさんとって食べました。amuspe anakne. korka tane anakne amuspe ka isam. horkareyep ka isam. esokka ka isam. あの、cicirakay ka isam. opitta oar isam. どこかにあがって、あの、湧き水の先の方さ行っていけば、どこかに残っているはずだけでも。その湧き水にあったところも、nep ka oar isam. 本当に。

訳：「私は子供のときから、カジカ釣りは、カジカ釣り、カワガニ釣り。カニはたくさんいたものだ。カニはとってもおいしい。実が詰っているから。ここのはびっちり身が入っているから、それを釣ってよく食べたのは覚えているよ。母もカニ釣りをした。舟でカニ釣りをした。穴に入っているのを、ミミズを釣り糸につけて垂らしてやると、出てきてかぶっところ、つかむから、引っ張れば落ちないで捕まえられる。カニはそうやってたくさん食べました。けれど、今はカニもいない。カワエビもいない。カジカもいない。ドジョウもいない。みんないなくなってしまった。どこか川上のほうに行って、水の湧いている先のほうに行けば、どこかに残っているはずだけれど、その湧き水になっていたところも何もなくなってしまった。本当に」

このような現実のカワガニに対する思い出が、物語を語る際にも蘇っていたことは確かであろう。一方、悪役として登場するのは91年の語りではオキクルミカムイの娘であり、93年の語りでは妹ということになっている。オキクルミの妹というのは、沙流地方や幌別での伝承にも登場するが（幌別ではオキキムイの妹）、娘というのは寡聞にして知らない。それに加えて、91年の語りは久しぶりに思い出したばかりのものであり、最初はサマユンクルの娘だとして語っていたのを訂正したものであるから、93年の「妹」のほうが本来の伝承であった蓋然性が高いと思われる。

さて、このオキクルミの妹は他の記録ではまず良い精神の持ち主として描かれる存在であり、本編のように悪役で登場する話は珍しい。一方オキクルミ自身は、本編でも他の話と同様、善良でしかも力のあるカムイとして描かれている。えらいカムイであるオキクルミの妹と、ちっぽけなカニとが対等にわたりあって、オキクルミのほうが妹の悪行をわびるという構図がこの話の面白いところである。

その肉体を何らかの用途で利用するための殺害（狩猟）は、それに対する謝礼を行うかぎりカムイからも、むしろ感謝されるべき行為ととらえられているのに対し、そういった目的ではなく謝礼も伴わない殺戮・傷害は、相手がとるに足らない小動物であっても、強烈なしっぺ返しを食らうということが、教訓として伝えられる話である。

食べものの共有という思想も、この話から読み取れる。それも人間同士の共有だけではなく、人間も動物も等しく共有すべきであるという考え方は、人間がそれ以外のものとひとつの社会共同体をなしていると考えているという点で、アイヌ的なものであるといえる。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、=（イコール）は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_（アンダーバー）を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w_a → an ma. h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。... とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それを示しておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合にのみ示してある。

今回は韻文資料であるので、YUCIKAYUCI というサケヘで区切られた詩句を一行として訳をつけた。誌面の関係で一行に収まりきれないテキストは次の行に送ったが、このカムイユカラは基本的に各行ごとにサケヘがつくタイプなので（『物語世界』第一章・「サケヘの挿入形式」参照）、原則としてサケヘから次のサケヘまでがひとつの詩句の単位となっていると考えてもらってよい。

参考文献略称

- 『久保寺辞典稿』：久保寺逸彦編（1992）『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会
『コタン生物記』：更科源蔵・更科光（1976-77）『コタン生物記』全3巻 法政大学出版社
『沙流方言辞典』：田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館
『鍋沢叙事詩』：門別市郷土史研究会編（1969）『アイヌの叙事詩』
『分類辞典：動物篇』：知里真志保（1953）『分類アイヌ語辞典 植物篇・動物篇』：『知里真志保著作集』別巻1 平凡社
『物語世界』：中川裕（1997）『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー

本文 : N9102183YK

YUCIKAYUCI	pet turasi	川をのぼって
YUCIKAYUCI	paye=as ¹ h_ine	行って
YUCIKAYUCI	paye=as ayne	行くうちに
YUCIKAYUCI	sine worop ² an	一匹の干魚が水につけてあった。
YUCIKAYUCI	tanpe kusu	そこで
YUCIKAYUCI	worop a=e kor an=an	干魚を食べていた。
YUCIKAYUCI	enuki awa	すると
YUCIKAYUCI	pirakka ³ us pe	下駄を履いたものが
YUCIKAYUCI	ran humi as	下りてくる音にする。
YUCIKAYUCI	inkar=as awa	見ると
YUCIKAYUCI	Samayunkur	サマユンクルの
YUCIKAYUCI	matnepoho	娘が
YUCIKAYUCI	rap ⁴ ki ki na	下りてきた。

¹ paye=as : ここと、8行ほど後の inkar=as だけ、一人称複数形が使われている。このように千歳や沙流地方のカムイユカラでは、冒頭部や終演部、決まった言い回しのところだけ一人称複数形を使うことが多い。

² worop : woro 「水に漬ける」 p 「もの」。鮭を干して satcep 「干魚」として保存してあるものを食べる時には、一回水に漬けて戻す（北海道方言：うるかす）。それを worop というらしい。これについては、この後で次のような聞き取りを行っている。

（中川） worop っていうのは、水の中に魚をつけておいたの？

（白沢） 乾いたやつね。長く干すでしょう。それ真中しばったかして、こううるかすもんらしいんだ。そうやっては、なんぼか食べたおぼえあるけども。わしのおかあさんはやったの見たことある。その川さうるかして、うるければこんどね、こう、ナタもって tatatata 「刻む」するんだ。そうすると、このくらいな幅に刻むんだわ。

（中川） 1センチくらいの幅に。

（白沢） そうやって刻んでね。イモやら、なっばどっさり入れて、そこさ、混ぜてたくんだ。ohaw 「鍋物」こしらうの。そうすれば、こんどソバ粉あればソバ粉ねってさ、刻んで入れるんだ。

（中川） うどんみたいにして？

（白沢） うん。そして、油はあの、昔の木のしゃもじいばい入れて、炊く。おっきなこんな鍋でこしらうからね。

（中川） 油を。

（白沢） 油入れるの。なっばも干せた魚も入るから。魚の油。昔はクマの油やらシカの油やら、入れて食ったもんらしいけど、iwasi sum 「イワシ油」っていったね。うまいもんだよ、しばらくたてたやつ。

³ pirakka : 「下駄」。日本語東北方言から入った語だと言われている。物語中に和人が悪者として登場するときには、pirakka us pe 「下駄を履いた者」として出てくることが多い。ここでも、pirakka を履いて登場させることで、悪いやつというイメージを演出しているのであろうと思う。

⁴ rap : いったん ran 「下りる」という単数形の形で言っておきながら、rap という複数形の形に言い

YUCIKAYUCI	i=nukar wa	私を見て
YUCIKAYUCI	tan wen amuspe	「この悪いカニめ!
YUCIKAYUCI	a=e rusuy kusu wor a=omare	私が食べたいので水につけておいた
	a=ritenka kusu	私が柔らかくするために
	wor a=omare a cep	水につけておいた魚を
YUCIKAYUCI	e ruwe an	食べたのか」
YUCIKAYUCI	itak ki ki kor	そう言いながら
YUCIKAYUCI	kor wen puri	持ち前の癩癩を
YUCIKAYUCI	enantuykasi	顔の上に
YUCIKAYUCI	epukitara ⁵	むらむらと表した。
YUCIKAYUCI	i=esikari	私をつかんで
YUCIKAYUCI	a=teke kekke	私の手を折り
YUCIKAYUCI	a=kema kekke	私の足を折り
YUCIKAYUCI	toop herepasi ⁶ i=eyapkir_ na	ぽーんと川の真ん中の方に投げ捨てた。
YUCIKAYUCI	tek ka a=sak	手も無く
YUCIKAYUCI	kema ka a=sak	足も無く
YUCIKAYUCI	cis=an kor mom=an ki na	私は泣きながら流されていった。
YUCIKAYUCI	mom=an ayne	流されていって、ようやく
YUCIKAYUCI	a=un cisehe a=osirepa na	私の家にたどり着いた。
YUCIKAYUCI	iki=an ayne	そうしているうち
YUCIKAYUCI	amuspe suy or_ ta	カニの穴に
YUCIKAYUCI	ahun=an ki wa	入って
YUCIKAYUCI	cis=an kor an=an ruwe ne	泣いていた。
YUCIKAYUCI	enuki awa	すると

替えている。三人称で、主語は明らかにひとりなのに複数形になる、こういう現象は韻文で見られる現象であり、これに対してはあまりうまく説明は見つかっていない。複数形で敬意や丁寧さを示すという解釈もあるが、果たしてそれでこの現象を一般化できるかどうかは、まだ一考を要する。

⁵ kor wen puri enantuykasi epukitara : 常套句としてよく使われる表現だが、kor wen puri は直訳すれば「(彼女の) 持つ悪い性格・振舞い」ということ。性格として持っている粗暴さ、激しやすさなどが、顔に表れてくるということであろう。

⁶ herepasi : he 「頭」 rep 「沖の方へ」 asi 「～を立てる」という語構成で、通常は「岸から沖に向かう方向へ」という意味であるから、ここでも海に向かう方、すなわち川下に向かってと考えてもよさそうだが、それを表すには hepasi という副詞もあり、内容としても「遠くに投げた」ということが言いたいのであるから、川岸から離れる方向、すなわち川の真ん中のほうに向かって投げたと考えておく。

YUCIKAYUCI	なんたっけ	
	wen pon katkemat	悪い若婦人の
YUCIKAYUCI	teke a=kaye	手を私は折り
YUCIKAYUCI	kema a=kaye	足を私は折って
YUCIKAYUCI	ki kusu ne sekor	やろうと
	yaynu=an kor an=an	思っていた。
	iruska=an w_a cis=an kor	腹を立てて泣いて
	kesto an kor cis=an kor	毎日泣いて
	an=an ruwe ne	いたのだ。
	ipe=an kusu apkas ...	ものを食べに歩く
	apkas kema ka	歩く足も
	a=i=kokekke ⁷ wa isam	折られてしまった
YUCIKAYUCI	ki ruwe ne kusu	ものなので
YUCIKAYUCI	pon hemanta ⁸	若い何やらの
YUCIKAYUCI	kema a=kekke	足を折って
YUCIKAYUCI	ki kusu ne sekor	やろうと
	yaynu=an kor an=an ayne	思いながらいて
YUCIKAYUCI	pon Samayunmat ⁹	若いサマユンマツの
YUCIKAYUCI	kemaha a=kaye	足を折り
YUCIKAYUCI	tekehe a=kaye	手を折り
YUCIKAYUCI	enuki awa	すると
YUCIKAYUCI	orowano pon katkemat cis kor	すると若い婦人は泣きながら
	kemaha kay pe ne kusu	足が折れたので

⁷ apkas kema ka a=i=kokekke : a=「人が」i=「私に」ko-「対して」kekke「～を折る」ということで、a=kemaha a=kekke とほぼ同じ意味になるが、ここでの apkas kema は概念形だと考えられる。逆に考えれば、おそらく所属形を用いた apkas a=kemaha という表現はできないので、概念形で「歩く(ための)足」という表現を行い、それによって不明になった所有主を、ko-を用いて表示しているのだと考えられる。

⁸ hemanta : その前に「なんたっけ wen pon katkemat」、その後に「pon Samayunmat」と言っていることから、この部分はちょっと記憶が不確になっていたらしい。それが hemanta「何やら」という語で表明されていると思われる。

⁹ Samayunmat : Samayunkur を「Samay(という地名)の人」と解釈して、その kur「人・男」を mat「女」に置き換えた珍しい表現。知里真志保は、Samayekur→Samayunkur という変化を考えているが、そのような変化があったとするならば、意味不明の Samay(知里自身はこれを Saman「シャーマン」ye「～を言う」と解釈している)という語を地名として再解釈するという心理が働いたという説明が考えられるが、それに合致するような例のひとつである。

kesto an kor cis kor an na. 毎日泣きながらいた。
 YUCIKAYUCI enuki awa すると

ちょっと間違ったわ。Okikurmi であったんだ。Okikurmi の娘。その amuspe の指みんな折ってなげたやつ、Okikurmi であった。神様。Samayunkur は人間でしょ。ただの aynu だっていうから、そしてあの、こんど、

	Okikurmi kamuy	オキクルミカムイは
YUCIKAYUCI	ine ¹⁰ iki kamuy	どのカムイがやったのか
YUCIKAYUCI	hunara kor an	探していた
YUCIKAYUCI	ki p ne korka	ではあるが
YUCIKAYUCI	situkari a=urarkuste ¹¹	私は自分の前にもやをかけて
YUCIKAYUCI	an=an awa	いたが
YUCIKAYUCI	nenositukari e=urarkuste wa ¹²	そのように自分の前にもやをかけて
	e=an y_akka wen	いてもよくない
	sekor yaynu=an kusu	と、思ったので
YUCIKAYUCI	asinuma iki=an katu ne hi	私がやったのだということ
	a=nukare ¹³ ruwe ne	見せてやった。
YUCIKAYUCI	ki akusu	すると
YUCIKAYUCI	ne hi pak anakne	それまでは
	amuspe tekehe kay	カニは手が折れ
	amihi ¹⁴ kay kor	ハサミが折れると

¹⁰ ine : いくつか選択肢があるうちの「どっち」ということを尋ねる疑問詞。sirokane pon seta he e=kor_rusuy? konkane pon seta he e=kor_rusuy? ine e=kor_rusuy pon seta e=ye wa ne yakne, e=tura wa e=san y_ak pirka na.(N9211271UP)「銀の子犬が欲しいか? 金の子犬が欲しいか? どっちが欲しい子犬か言ったら、(そっちを)連れて山を下りていいよ」のような用例がある。

¹¹ situkari a=urarkuste : si-「自分」tukari「～の手前」urar「もや」kuste「～を通す」。自分の正体や所在を隠すために、カムイ(あるいは同様の力を持ったもの)がよく行すが、これができるのはかなり巫力の強いものであることが多い。ここでも力のあるオキクルミカムイにも見つけられないというのだから、この主人公のカムイとしての力はかなりなものであることがわかる。この表現は、3つのバージョンごとに少しずつ異なっている。

¹² e=urarkuste wa e=an : 自分を指すのに e=という2人称接辞を用いている例。

¹³ nukare : どうやって見せたかということについては言及されていないが、通常の展開でいけば、夢に見させたということであろう。

¹⁴ amihi : am は「爪」であり、カニのハサミも指す。tek と kema を対比させていることから、tek もハサミのほうを指していると考えられるので、ここでの tekehe kay, amihi kay という表現は、同格

	hetukpa ka somo ki p	再び生えてはこないもの
	ne a korka	であったが
YUCIKAYUCI	kamuy ne kusu ¹⁵	カムイであるので
YUCIKAYUCI	tewano anak	これから
YUCIKAYUCI	amuspe tekehe kay yakka	カニは手が折れても
YUCIKAYUCI	kemaha kay yakka	足が折れても
YUCIKAYUCI	asirkinne kemaha hetuku kuni	新しい足が生えてくるように
YUCIKAYUCI	Okikurmi kamuy	オキクルミカムイが
YUCIKAYUCI	ye ka ki kar ka ki ruwe ne	言いもし、しもしてくれた
YUCIKAYUCI	ki akusu	ところ
YUCIKAYUCI	kemaha kay pon katkemat ka	足の折れた若婦人も
	kemaha uous	足がつながった。
YUCIKAYUCI	asinuma ka	私も
	a=kemaha asirkinne	私の足も新しく
YUCIKAYUCI	a=tekehe ka	私の手も
	asirkinne hetukpa ki na	新しく生えてきた。
YUCIKAYUCI		
	<以下散文>	
	asir kema a=kor. asir tek kor ¹⁶ easkay hi ka	新しい足を手に入れ、新しい手を手に入れるように
	Okikurmi kamuy kar wa i=kore kuskeraypo	オキクルミカムイがしてくれたおかげで
	amuspe utar tekehe kay yakka	カニたちは手が折れても
	kemaha kay yakka	足が折れても
	asirkinne hetukpa katu ne ruwe ne kusu	新しく生えてくるのだから
	a=ye na. pirkano nu yan	話すのだよ。よく聞きなさい。
	sekor	と。

表現とみなしてよいだろう。

¹⁵ kamuy ne kusu : この一文は、ちょっと意味が曖昧である。カニはカムイだから、というのが一番素直な解釈かもしれないが、手足が新たに生えてくるのはカニの特性であり、他のカムイに同様のことができるわけではない。だから、このような話が作られたと考えられる。とすると、オキクルミが(えらい)カムイであるので、そのように自分のことをしてくれる力があつたのだ、という解釈のほうが正しいかもしれない。

¹⁶ asir tek kor : 文法的にはその前の asir kema a=kor と同じように、asir tek a=kor となったほうがよさそうな気がする。この部分はちょっと考えながらしゃべっている感じなので、その後をどういふふうにつないでいくか迷って、人称がゆれているのかもしれない。

本文 : N9102184.YK

YUCIKAYUCI	amuspe a=ne wa ¹⁷	私はカニであって
YUCIKAYUCI	an=an hike	暮らしていたところ
YUCIKAYUCI	yaykomismu	ひとりで寂しく
YUCIKAYUCI	a=ki ki kusu	思ったので
YUCIKAYUCI	pet turasi	川を上って
YUCIKAYUCI	sineantota	ある日のこと
YUCIKAYUCI	arpa=an na	上って行った。
YUCIKAYUCI	arpa=an ayne	上っていくと
YUCIKAYUCI	sine worop an	一匹の干魚が水に漬けてあった。
YUCIKAYUCI	tanpe kusu	それなので
YUCIKAYUCI	worop a=e kor an=an ki na	私は干魚を食べていた。
YUCIKAYUCI	ki akusu	すると
YUCIKAYUCI	pirakka us pe	下駄を履いた者が
YUCIKAYUCI	ran humi as	下りてくる音がした。
YUCIKAYUCI	tanpe kusu	そこで
YUCIKAYUCI	inkar=an awa	見てみると
YUCIKAYUCI	Okikurmi kamuy	オキクルミカムイの
YUCIKAYUCI	matnepoho	娘が
YUCIKAYUCI	ran ¹⁸ ruwe ne	下りてきたのだった。
YUCIKAYUCI	i=nukar_rok pe	私を見ると
YUCIKAYUCI	kor wen puri	持ち前の癩癩を
YUCIKAYUCI	enantuykasi	顔の上に
YUCIKAYUCI	epukitara	むらむらと起こして
YUCIKAYUCI	enuki hine	そして

¹⁷ amuspe a=ne wa : このように、冒頭で自分の正体を明かすのは、カムイユカラでは比較的珍しい。実は、この N9102184YK を語り始める際に、まず散文口調で amuspe a=ne wa an=an hike 「私はカニであったが」と語りだしたので、「sakehe を入れてやってくれ」と注文を出して、やり直してもらっている。ということで、ウエペケレの出だしの形式をとったまま、節をつけて語りだした結果、こうなったと考えられる。

¹⁸ ran : 他の二つのバージョンでは rap と複数形になっている箇所である。このように韻文中の単複の使い分けは、一定の条件化でかならずそうなるとは言えない部分があり、説明のむずかしい問題である。

YUCIKAYUCI	i=esikari	私をつかんで
YUCIKAYUCI	a=kemaha kekke	私の足を折り
YUCIKAYUCI	a=tekehe kekke	私の手を折り
YUCIKAYUCI	toop herepasi	ぼーんと川の真ん中のほうへ
YUCIKAYUCI	i=osura na "tan wen kamuy	私を投げ捨てた。「この悪いカムイめ!
YUCIKAYUCI	a=e rusuy kus	私が食べたいので
YUCIKAYUCI	wor a=omare rok pe	水の中に漬けてあったものを
YUCIKAYUCI	e wa okere"	食べてしまった」
YUCIKAYUCI	itak ki ki kor i=osura na	そう言いながら、私を投げ捨てた。
YUCIKAYUCI	cis=an ki kor	私は泣きながら
YUCIKAYUCI	kema ka a=sak	足も無く
YUCIKAYUCI	tek ka a=sak	手も無く
YUCIKAYUCI	karkarse=an w_a	転がって
	mom=an ki na	流れていった。
YUCIKAYUCI	mom=an w_a san=an ayne	流されて川を下っていくうちに
YUCIKAYUCI	a=un cisehe	私の家に
YUCIKAYUCI	a=osirepa na	たどりついた。
YUCIKAYUCI	iki=an ayne	そうしているうちに
YUCIKAYUCI	a=kor cise onnay	私の家の中に
YUCIKAYUCI	neun poka iki=an ayne	何とかして
	cise onnay a=oahun ki wa	家の中に入って
YUCIKAYUCI	cis=an kor an=an	泣いていた。
	kesto an kor	毎日
YUCIKAYUCI	a=kemaha a=kekke kusu	足が折られたので
	a=kemaha kekke kuni	私の足を折ったように
YUCIKAYUCI	kemaha a=kaye	(あの女の)足を私が折ってやる
	sekor yaynu=an kor	と、思いながら
YUCIKAYUCI	cis=an kor an=an awa	泣いて暮らしている
YUCIKAYUCI	pon katkemat	若婦人の
YUCIKAYUCI	kemaha kay na	足が折れた。
YUCIKAYUCI	ki akusu	すると
YUCIKAYUCI	neun ne wa	どうして

	kemaha kay ruwe ne ya	足が折れたのだろうか
	Okikurmi kamuy	オキクルミカムイが
YUCIKAYUCI	hunara kor an	探っている
YUCIKAYUCI	ki p ne korka	けれども
YUCIKAYUCI	iruska yuppa p	ひどく怒って
YUCIKAYUCI	a=ne p ne kusu	私はいたので
YUCIKAYUCI	a=situkari-	私は自分の前に
YUCIKAYUCI	urarotte ¹⁹	もやをかけた。
YUCIKAYUCI	ki p ne kusu	それなので
YUCIKAYUCI	iki=an katu erampewtek wa	私がやったということがわからずに
YUCIKAYUCI	hunara kor an	探している。
YUCIKAYUCI	a=eyaykowepeker	よく考えて
	inkar=an hike	見ると
YUCIKAYUCI	oripak kewtum ka	恐れ多い気持ちも
	a=yaykorpore	してきた。
YUCIKAYUCI	tanpe kusu	そこで
YUCIKAYUCI	a=kemaha a=kekke wa	私の足が折られて
	a=ruska kusu pon katkemat	腹を立てたので、若婦人の
	kemaha a=kaye katu	足を私が折ったということを
YUCIKAYUCI	a=eramuan a=nukare ki na	私は知らせ、(夢に) 見せてやった。
YUCIKAYUCI	ki akusu	すると
YUCIKAYUCI	kemaha kay ...	「足が折れた…」
	amuspe kemaha kay yakka	カニというものは足が折れても
	hetukpa somo ki	再び生えてこない
	kuni p ne a korka	はずのものだったが
YUCIKAYUCI	hawē ne yakne	そういうことであれば
	amuspe kamuy tekehe	カニのカムイの手が
	asirkinne hetuku kuni	新しく生えてくるように
YUCIKAYUCI	kemaha ka hetukpa kuni	足も生えてくるように
YUCIKAYUCI	a=e=koinkar ki kus ne na	私が見守ってさしあげましょう。

¹⁹ situkariurarotte : si-「自分」tukari「～の手前」urar「もや」otte「～を～に掛ける」。N9102183YK
では situkari a=urarkuste という表現だったが、kuste が otte に変わっている。

YUCIKAYUCI	a=kor katkemat kemaha ... pon katkemat kemaha pirka kuni i=koinkar wa i=korpare yan	私の妻の足… 娘の足が よくなるように見守って ください」
YUCIKAYUCI	sekor yaynu kor an akusu a=kemaha ka hetuku	と、(オキクルミカムイ) が心に思っていると 私の足も生え
YUCIKAYUCI	a=tekehe ka hetuku	私の手も生え
YUCIKAYUCI	ki p ne kusu	たので
YUCIKAYUCI	pon katkemat	若婦人の
YUCIKAYUCI	kemaha hetuku kuni a=ekoinkar wa hetuku an pe でない、 kemaha uous kuni a=ekoinkar wa	足が生えるように 私が見守って 生える…のではなくて 足がつながるように 私が見守って
YUCIKAYUCI	kemaha uous ... pirka uous ki ruwe ne	足がつながった… ちゃんとつながった。
YUCIKAYUCI	tapne kane an pe kusu kema hetuku ka ... kemaha kay tekehe kay kor hetuku ka somo ki amuspe asirkinne kemaha hetuku kuni	ということなので 足が生えても… 足が折れ、手が折れると 再び生えてはこないカニが 新しく足が生えてくるように
YUCIKAYUCI	Okikurmi kamuy	オキクルミカムイが
YUCIKAYUCI	<以下散文> i=ekoinkar ki kusu orowano oka amuspe tekehe kay yakka kemaha kay yakka hetukpa ruwe ne kusu <su> a=ye hawe ne na ²⁰	私を見守ってくれたので それ以来、カニは手が折れても 足が折れても 生えるようになったので 話しておくのだ

²⁰ a=ye hawe ne na : 常套的な表現で、ウエペケレやカムイユカラの末尾に必ずと言ってよいほど出てくるが、訳しにくい表現である。hawe ne は他人聞いた話をもとにして推測した内容を語る場合にも用いられるが、自分の発言に対しても用いることがある。その場合は、このテキストのように「今私がこの話をしているのは、このような内容のことを伝えたかったからだ」というような意味合いで

sekor amuspe kamuy isoytak ruwe ne.

と、カニのカムイが物語った。

使われることが多い。

本文 : N9305232KY

YUCIKAYUCI ²¹	pet turasi	川を上って
YUCIKAYUCI	arpa=an na	私は行った。
YUCIKAYUCI	sine worop an	水に漬けた魚が1本あった。
YUCIKAYUCI	a=e kor an=an ruwe ne.	それを食べていた。
YUCIKAYUCI	ki akusu	すると
YUCIKAYUCI	pirakka us pe	下駄を履いた者が
YUCIKAYUCI	ran w_a ... rap w_a arki ²²	下りて来た。
YUCIKAYUCI	i=nukar wa	私を見て
YUCIKAYUCI	i=kotannekursikkeruru ²³	私をじっと睨みつけた。
YUCIKAYUCI	"a=e=ere kusu wor a=omare worop he an ²⁴ ?	「お前に食べさせるために 水に漬けておいた魚じゃないよ!
YUCIKAYUCI	tan kamuyasi ²⁵	この化け物
YUCIKAYUCI	wor a=omare cep e wa okere"	水に私が入れておいた 魚を食べてしまった」
YUCIKAYUCI	itak ki ki kor	言いながら
YUCIKAYUCI	i=esikari	私をつかんだ。
YUCIKAYUCI	ci=teke kekke	私の手を折り
YUCIKAYUCI	ci=kema kekke ²⁶	私の足を折り

²¹ 91年に録音された2編と、93年に録音されたこの1編とでは、メロディが少し違っている。91年版では *sakehe* がユチカユチーというような歌い方になっていたのに対し、本編ではユーチカユチと書いたほうがよいような、少し引き伸ばされた歌い方になっている。

²² *rap w_a arki* : N9102183KY でも、この部分は一度 *ran* と単数形で言ったものを、二度目には *rap* と複数形に変えていたが、ここではわざわざ言い直している。註4参照。

²³ *kotannekursikkeruru* : *ko* 「～に向かって」 *tanne* 「長い」 *kur* (虚辞) *sik* 「目」。*keruru* は沙流方言辞典では「...をギョロギョロする(擬態の重複)」となっているが、*sikkeruru* という形以外の用例は、今のところ見つからない。「～に向かって、長いこと目をギョロギョロさせて睨みつける」という意味である。

²⁴ *wor a=omare worop he an* : 直訳すれば「水の中に私が入れておいた、*worop* であるのか?」ということで、疑問文の反語的用法である。

²⁵ *kamuyasi* : 「化け物」という意味だが、方言によって *kamiyasi*, *kamnasi* など様々な形になる。語源的に *kamuy* 「カムイ」と *oyasi* 「(樺太方言で) 化け物」というふたつの語に関係があると考えると、この *kamuyasi* が語源に一番近い形ということになる。

²⁶ *ci=teke* : *ci=teke*, *ci=kema* のように、この部分だけ一人称複数形の接辞が用いられている。註1で述べたように、沙流、千歳で伝承されるカムイユカラには、このように全体としては四人称だが、部分的に一人称複数で語られるという現象が、まま見られる。ただし、N9102183YK、N9102184YK

YUCIKAYUCI	toop herepasi	ずっと沖（川岸から遠いほう）に
	i=eyapkir na	私を投げ捨てた。
YUCIKAYUCI	orowano cis=an kor	そこで私は泣きながら
	mom=an ki na.	流されていった。
YUCIKAYUCI	a=un cise ta	私の家に
YUCIKAYUCI	neun poka	なんとか
YUCIKAYUCI	iki=an ki wa	して
YUCIKAYUCI	ahun=an ki na	入ったのだ。
YUCIKAYUCI	a=kekke usi arka p ne kusu	折られたところが痛むので
YUCIKAYUCI	cis=an kor an=an	私は泣きながらいた。
YUCIKAYUCI	ki akusu	すると
YUCIKAYUCI	inkar=an ²⁷ awa	見ると
YUCIKAYUCI	Okikurmi kamuy	オキクルミカムイ
YUCIKAYUCI	kor_ turesi	の妹
YUCIKAYUCI	ne rok'okay ²⁸	であったのだった。
YUCIKAYUCI	iruska=an kusu	私は腹が立ったので
YUCIKAYUCI	Okikurmi kamuy	オキクルミカムイ
	kor_ turesi	の妹の
YUCIKAYUCI	kemaha a=kaye	足を折り
YUCIKAYUCI	tekehe a=kaye ²⁹	手を折った。
YUCIKAYUCI	ki akusu	すると
YUCIKAYUCI	Okikurmi kamuy	オキクルミカムイ
YUCIKAYUCI	ine iki wa turesihi	どこのどいつが、妹の
	kemaha kekke	足を折り
	tekehe kekke	手を折ったのか

では、同じ箇所が a=kema, a=teke のようになっているのであり、かならずしも、この部分がこの形で固定して記憶されているというわけでもない。

²⁷ inkar=an: 「見る」と言っても、この主人公は手足をもぎとられて自力では動けないのであるから、再びでかけて行って「見た」わけではない。自分の家(N9102183YKによれば、amuspe suy「カニの穴」)にいたまま、カムイとしての力、いわば千里眼のようなもので「見た」のだと考えられる。

²⁸ rok'okay: 助動詞 anan の複数形。後になって考えてみて、そうであったということに気づくということを表す。

²⁹ kemaha a=kaye tekehe a=kaye: 91年の2つのバージョンでは、しかえしに足を折ってやると念じることによって、女の足が折れるという表現になっている。省略されているが、ここでもそういう発想であろう。

YUCIKAYUCI	ney wa ek y_a	どこから来たのか
YUCIKAYUCI	hunara kor an	探している。
YUCIKAYUCI	ki p ne korka	けれども
YUCIKAYUCI	a=sietok'urarotte ³⁰	私は自分の前にもやをかけて
YUCIKAYUCI	i=pa ka niwkes	私を見つけることができずに
YUCIKAYUCI	ki ruwe ne	いる。
YUCIKAYUCI	patek kor_ turesi ³¹ ne kusu	たったひとりの妹なので
	neun poka kemaha ka ...	何とかして足も…
	kemaha ka tekehe ka	足も手も
	upiste ³² rusuy kusu	治したいので
YUCIKAYUCI	hunara ki na	探している。
YUCIKAYUCI	ney pakno sietok'urarotte	いつまでも体の前にもやをかけて
	a=ki wa ne yak	いたら
YUCIKAYUCI	a=eoripak kusu	おそれおおいので
YUCIKAYUCI	tapne tapne pet turasi	これこれこのように川を上って
	sineanta arpa=an w_a	ある日行って
	worop an w_a	水に漬けた魚があつて
	a=e kor an=an akusu	食べていたら
YUCIKAYUCI	e=kor_ turesi ³³ ne	あなたの妹で
	rok'okay pe ran ki ki wa	あつたものが下りてきて
YUCIKAYUCI	i=esikari	私をつかみ
YUCIKAYUCI	a=tekehe mespa ³⁴	私の手をむしり

³⁰ a=sietok'urarotte : 91年の二つのバージョンでは、si-tukari「自分の手前」となっていたが、ここでは si-etok「自分の前」となっている。tukari はそれに向かって移動を行った場合の目標物の直前、etok は自分自身が移動している場合の、その前方を指す。この場合は kotca「静止しているものの前」を用いて、si-kotca としてもよさそうな気もする。

³¹ patek kor_ turesi : 直訳すれば「それだけ持つ妹」。「妹として持つのはそれだけである妹」ということで、「たったひとりの妹」と訳す。patek は pirka cep patek koyki「よい魚ばかり捕る」のように、副助詞としても使われるが、このように文頭に立って自立的な用法でも用いられる。

³² upiste : 本来の意味は「～を揃える」。「五体満足な体にする」というような表現であろう。

³³ e=kor_ turesi : ここで e=が使われているということは、カニからオキクルミに対する直接話法をとっているように見えるが、その8行あとでは、cis=an kor an=an katu a=nukare のように言っており、間接話法的な表現になっており、途中で話法が切り替わってしまったように思える。

³⁴ mespa : 何かからその一部を、そいだりむしったりして切り取ること。前のほうでは kekke とか kaye という「～を折る」という意味の動詞が使われているが、ここで mespa という動詞が使われていることで、ただ折ったのではなく、手足をむしりとったのであることがわかる。

	a=kemaha mespa	私の足をむしり
	toop herepasi i=osura wa	ずっと川の真ん中のほうに私を投げ捨てて
	cikir ³⁵ ka a=sak	私は足も無く
YUCIKAYUCI	tek ka a=sak	手も無く
YUCIKAYUCI	cis=an kor an=an katu	泣きながらいた様子を
	a=nukare ruwe ne	私は（夢に）見せた。
YUCIKAYUCI	ki akusu	すると
YUCIKAYUCI	orowa i=koyaykarap	それから私に謝罪した。
YUCIKAYUCI	inaw ka ke na	イナウも削った。
YUCIKAYUCI	tane pak anakne amuspe ³⁶	今まではカニは
	tekehe a=mespa yakka	手をむしられても
	hetukpa ka somo ki p	生えてはこないもの
	ne a korka	であったけれど
YUCIKAYUCI	e=tekehe ka e=kemaha ka	あなたの手も足も
	hetukpa kuni	生えるように
YUCIKAYUCI	a=e=ekoinkar	私があなただをお見守り
YUCIKAYUCI	ki kus ne na	いたしますよ。
YUCIKAYUCI	a=wenmataki ³⁷	私の悪い妹
YUCIKAYUCI	kor pakane ... wen pakane	その馬鹿さ、しょうのない馬鹿さ

<以下散文>

ってというのは **sisam itak** だね。

ってというのは、日本語だね。

だけどわし、**sisam itak** と **aynu itak** の

でも私は日本語とアイヌ語の

その時に生まれたもんだもの。仕方ない (笑)。³⁸ 両方を使う時代に生まれたんだもの、仕方ない。

³⁵ **cikir** : 他の個所では **kema** という言葉を使っている。 **kema** と **cikir** の関係は方言によって変わるが、千歳方言では **cikir** はほぼカムイユカラやユカラなどの本来韻文で語られるジャンルに限られ、ウエベケレや日常会話では **kema** のほうをもっぱら使う。

³⁶ **amuspe** : このバージョンでは、ここで初めて主人公の正体が明かされる。このように、主人公が何者であるかというのは、話の終わりのほうになるまで明確に表現されないほうが、カムイユカラとしては一般的である。

³⁷ **wenmataki** : **matak**, **-i** はどの方言でも「姉から見た妹」を指す。この話でもここまでずっと **tures**, **-i** という言葉で「妹」を指してきたのであり、ここでも **a=wenturesi** となってしまうべきところなのだが、物語の中では男が自分の妹を **matak**, **-i** で呼んでいる例がよくある。話者自身が女性なので、自分が使いなれているほうが、つい出てしまうのだろうか？ ちなみに千歳方言の日常会話において「兄から見た妹」を指す言葉は **macirpe** という。

³⁸ この部分は **pakane** 「馬鹿である」という表現を使ってしまったために、「馬鹿」というのは日本語だからということと言っている部分だが、これは白沢氏がたまたま日本語から取り込んで使ってし

orowa a=eyaykarap.
a=kemaha ka hetuku kuni
kamuy kar wa i=kore wa kusu,
orowa kor_ tek ... turesi
tekehe ka kemaha ka
uworot だか ueus だか³⁹
ki kuni a=ekoinkar hine,
a=kemaha ka ... kema ka us.
tek ka pirka⁴⁰ ruwe ne wa,
orowa, asinuma ka a=tekehe あの
a=tekehe ka hetuku,
a=kemaha ka upis⁴¹ ruwe ne kusu,
a=eysoytak hawe ne na.
sekor amuspe kamuy itak ruwe ne.
sekor ne a wa

そこで私も謝った。
私の足も生えてくるように
カムイがしてくれたので
それから彼の妹の
手も足も
つながる、っていうか、くつつくっていうか
するように私が見守って
私の足も…彼女の足もつき
手も治って
そして、私も、私の手…
私の手も生え、
足も揃ったので
その話をしているのだよ。
と、カニのカムイが語った。
ということでした。

(なかがわ ひろし・千葉大学人文社会科学研究所)

まった表現ではなく、アイヌ語の中にそれ以前から入っている可能性がある。『鍋沢叙事詩』中の「犬育て、悪者育て」という yukar には、Karapto un kur/ciwenkosunke/a=kopakane/ne hi tapan na 「カラフトびとに/だまされて/愚かで/あったものよ」(604) のように、ko-pakane という形でも用いられている。

³⁹ uworot だか ueus だか: 「だか」という日本語は、口にした表現がどうもしっくりしないと感じられた場合に、よく使われる。ここでは uworot と言ってから、ちょっと違うなという感じで、ueus と言いなおしている。91年の2編ではどちらも uous といっている。uworot は実際にある語かどうか不明。ueus は『久保寺辞典稿』に「pone ueush ushke 骨ノ関節部分」という記述があるので、「折れた骨がつながる」という表現には適しているかと思われる。

⁴⁰ tek ka pirka: その前に a=kemaha ka と言っているが、前後の文脈から考えてここはオキクルミの妹の手足のことを言っていると思われる。それなのになぜ tek のように概念形をとっているのかは不明。

⁴¹ upis: upis は「揃う」。手については hetuku 「生える」、足については upis と言っているのは、足のほうはたくさんあるからかもしれない。

Ainu Folklore Text-9
Nabe SHIRASAWA's *kamuyyukar*,
"The reason why crabs can regain their lost limbs "

NAKAGAWA Hiroshi

Summary:

These texts were three versions of the same *kamuyukar* "songs of Gods" recited by Nabe Shirasawa (1905-93, born in Chitose), two times on Feb. 18, 1991 and once on May 23, 1993.

Outline of text:

One day I was going up along a river and found a dried salmon soaked in the water. While I was eating it, a young woman came down and found me. She got angry saying "as I want to eat the fish I had soaked it in the river, but a bad monster has eaten it!", then she grabbed me and broke my limbs. She threw me into the river and I rolled down the river with no limbs. With crying I managed to reach my home and inspecting the woman by my magic power I found she had been the God Okikurmi's sister. Then I broke her limbs, too, with my power.

As his sister's limbs got broken suddenly, the God Okikurmi started to search who had done it. I covered myself with fogs, so that he could not find me. As I began to feel awe, however, for the God, via a dream I let him know what happened. Then he apologized to me and healed me of my limbs, saying "until now crabs have never grown again their lost limbs, but from now on I make them grow again." Hearing it I, too, apologized to him and I healed his sister's limbs.

This is the reason why crabs can regain their lost limbs. I told it to you, my folks.